

新資料にみる昭和天皇・ニクソン会談

森 暢平

1. はじめに

ここ数年、戦後皇室外交に関する研究が続いている。波多野勝の『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』¹⁾、佐道明広の『『皇室外交』に見る皇室と政治—日本外交における『象徴』の意味』²⁾、河西秀哉の『『新生日本』の出発と皇太子外遊』³⁾などである。1992年、天皇訪中の是非をめぐり、国論を二分する議論があった。これをきっかけに、皇室外交の問題点、広く言えば、戦後政治の中の象徴天皇の実像への関心が高まったことが、背景にあるだろう。

筆者の関心は、1975年秋の天皇訪米にいたるまでの日米関係にある。「ご訪米」と言われるこの外遊については、波多野が「皇室が外遊する意義として国際親善、文化交流を中心とした相互理解という点があることを見逃すことはできない」「とくに『人間天皇』という点は訪米を機に明確となった」⁴⁾と積極的に評価。佐道も「戦後の日米友好のシンボルとして、大きな成果をあげたということは間違いない」⁵⁾と、やはり前向きに評している。

しかし、こうした評価は当時の新聞解説とあまり変わらない。当時の新聞報道を読むと、平均的な日本人が抱いていた昭和天皇への親近感を、米国人も同じように持っていたと錯覚させる記事が多いのに気付く。一例を挙げれば、訪米3日目の1975年10月2日、ホワイトハウスの歓迎晩餐会で、天皇は、「私が深く悲しみとするあの不幸な戦争」という一節が有名になった、「お言葉」を述べる。これを聞いたキッシンジャー国務長官が、随員の藤山楯一特命全権大使に「自分は非常に感動した。きみ、このことをすぐプレスに伝えてくれ」⁶⁾と述べたという。『朝日新聞』は「陛下のお気持ちが、会場にしみわたったようである。大きな拍手がいつまでもいつまでも続き、会場は熱いものが満ちた。この一瞬が、この夜のクライマックスでもあった」と書いた⁷⁾。

しかし、外交には戦術と目標がある。米政府が天皇を大歓迎で遇し、日本を

喜ばそうとしたのも、そのメリットに着目したからにはほかならない。筆者がこのことに気付いたのは、米国立公文書館での一つの文書との出会いにさかのぼる。インガソル国務副長官からフォード大統領に宛てた「天皇訪問」という文書（1975年9月29日起草）の中に次のような一説があった。

「訪米を成功させることによって、緊密な米日関係に対する日本大衆の広い支持をはぐくみ、今後の重要な成果を生むことになる両政府間協力の基礎を強めることができる。訪米の成功を保証する我々の戦略は、天皇が通常日本で受けているのと同様な尊敬と威厳で天皇を遇すること、日本との関係が重要であることを示唆するような大統領の個人的なジェスチャーを天皇に対して示すこと、そして、訪米の広報的な側面に特に注意を払うことである」⁸⁾

具体的には、天皇、皇后主催の答礼晩餐（10月3日）にフォード大統領が出席することや、天皇夫妻がワシントンDCを離れる際に宿舎に挨拶に行くこと（10月4日）を提案している。外国元首に対して通常は行わない厚い好意を見せ、日本を驚かそうとしているのだ。実際これは実現し、特別待遇の一例としてメディアに取り上げられた⁹⁾。

1970年代の天皇制を研究するための一次資料は、『佐藤榮作日記』¹⁰⁾ や『入江相政日記』¹¹⁾ などに限られていた。限定的な資料しか使えない状況下にある研究が、新聞報道に頼りがちになるのは仕方がないことではある。ただ、報道には速報性という性格があり、その時点で分かっている事実の一側面しか伝えない場合も少なくない。この限界を乗り越えるには、新たな一次資料を探索する必要がある。

現在、米国立公文書館では、1970年代半ばの文書公開まで進んでいる。同国立公文書館所蔵の国務省文書、ニクソン政権ホワイトハウス文書、あるいはフォード大統領図書館の資料を使うと、さまざまな日米交渉の詳細が分かる。安全保障の分野では、ニクソン政権下の文書を使った我部政明の研究¹²⁾ がある。一次資料が限られる現代天皇制研究についても、米国の資料が有用であることはもっと知られていい¹³⁾。

特に、ニクソン政権時代、ホワイトハウスの秘密録音システムが、大統領執務室などでの会話や電話を自動的に記録していた、いわゆる「ニクソン秘密テープ」は役に立つ。猜疑心が強いニクソン大統領が仕掛け、ウォーターゲート事件で、大統領自身の事件への関与が明るみに出るきっかけになった重要資

料である。事件後、国立公文書館に移されたもののニクソン家の反対で公開が進んでいなかった。しかし、1996年、計3700時間の全面公開が合意され、公開が進んでいる。ホワイトハウスという密室での政権幹部の生々しい会話が聞けるようになっているのだ。丹念に探すと、日本関係の会話も少なくなく、米政府の本音を知ることができる¹⁴⁾。

一方、日本の情報公開法によって、日本側の行政資料も請求により、不十分ながら公開されるようになった。日本政府内の政策決定過程を知るため、筆者は、いくつかの文書公開を外務省に求め、20点あまりの一部資料が公開された。

本稿は、1971年9月の米アラスカ州での天皇ニクソン会談¹⁵⁾の政策決定過程を取り上げる。在位中の天皇による初外遊である「ご訪欧」¹⁶⁾の途上、アンカレッジに立ち寄り、会談が実現した。天皇訪米がその4年後に実現する端緒になった出来事である。

1975年の天皇訪米と比べれば、歴史の一断面に過ぎない。だが、当時の報道では知りえない米政府の真意、日本政府の政策決定過程を振り返ることは、皇室研究にとって決して小さなことではない。日米で新たな資料を発掘し、当時の報道と皇室外交の実相のギャップを埋められることを示す——。これを本稿の目的としたい。

2. 大統領の本音

昭和天皇は1971年9月26日、アンカレッジのエレメンドルフ空軍基地に降り立った。皇后を伴い、欧州7カ国を巡る「ご訪欧」の往路の立ち寄りである。ニクソン大統領は、首都ワシントンDCから約5400キロも離れたこの地まで、天皇を出迎え、歴史的な会談が実現した。

同じ年の7月15日、ニクソン大統領は「翌年、中国を訪問する」と突然、発表。敵対していた米中両国が日本の頭越しに握手した。対米関係を外交機軸にしていた日本政府は大きく困惑する。さらに、米政府は8月15日、米ドルと金の交換を停止し、輸入品に対し10%の課徴金を実施すると発表。ドル防衛のための新経済政策で、日本政府は、結果的に円切り上げから変動相場制に移行せざるを得なくなった。いずれも、日本政府に対して、政策協調のための事前協議はなく、二つのニクソン・ショックと呼ばれる。そもそも日米関係は、緘

維摩擦が解決しないまま冷え込んでいた。米国は、貿易黒字国日本に対し繊維輸出の自主規制を強く迫ったが、日本国内の業界の反発もあり、3年越しの交渉は決着していなかった。

ニクソン大統領が天皇を出迎えることが発表されたのは、二つ目のニクソン・ショックの5日後、会談の1カ月前¹⁷⁾のことである。事前準備に長い時間をかける天皇の外遊では、このような重要な日程が直前に割り込むことは通常はあり得ない。会談決定を伝える『朝日新聞』は、「ニクソン大統領が最近悪化している日米関係からみて、天皇のお出迎えという機会をとらえ、両国関係改善に役立てようと特別に配慮していることは明らかである」¹⁸⁾と解説。『読売新聞』も「各国元首の訪問の多い米国で、しかも公式訪問でなく、空路の都合で立ち寄られるにすぎない両陛下を、大統領が米大陸の果てまで出迎えるということも全く異例のことである」¹⁹⁾と、前例のない歓迎であることを強調した。確かに、米大統領がわざわざアラスカまで出迎えたことは異例であった。急速に悪化した日米関係を改善し、日本を友好国にとどめておくための米国の意図は間違いなくあっただろう。

『毎日新聞』はさらに進んで、「ニクソン大統領がこのようなアイデアを得たのは、同大統領が十八年前副大統領のころ宮中に参内、天皇陛下とお会いして以来、日本の天皇家に親近感を覚えているからという個人的な気持からだともみられている」²⁰⁾と踏み込んで推測している。ニクソン大統領は1953年11月の副大統領時代に、国賓待遇として来日、独立回復後、皇居で天皇と会談した初めての外国要人となった。波多野も、ニクソン大統領の「虚栄的な性格」を指摘しながら、「天皇と会見する史上初の現職大統領の榮譽を求めていたと思われる」²¹⁾と分析した。

会談時の友好的な雰囲気とあわせ、「皇室に愛着を持つニクソン」というイメージは、現在まで引き継がれている。宇佐美毅宮内庁長官も翌1972年3月30日の衆議院内閣委員会で、「昔、副大統領のときに日本に見えまして、両陛下が午餐を催して歓待されたこと、いろいろなことを述べられて、大へん喜んでそういうこと（アンカレジ会談—筆者注）が行なわれたわけでございます」²²⁾と述べた。

しかし、ニクソン秘密テープに収められた会話を聞くと、このイメージを修正する必要があるのに気が付く。ニクソン大統領がアラスカ行きを検討するの

は1971年7月30日午前。大統領執務室（オーバル・オフィス）で、大統領は次のように語る。同席者は、キッシンジャー大統領補佐官（国家安全保障担当）、ハルドマン首席補佐官である。

ヒロヒトだけれども、私にとって、ここ（ワシントンDC）への訪問を約束するより、そっち（アンカレジ）に行くほうがよほどよい。日本の公式訪問は、面倒（pain in the ass）だし、アンカレジに行くことは厭わない。それにはカリフォルニアから飛びたい。9月下旬にカリフォルニアにいることに対する曖昧な言い訳になる。少し飛ばばアンカレジだ。この方法であれば、ここまで招待するよりは、ずっとよいジェスチャーを示すことができる²⁹⁾。

大統領は続けて、アンカレジで天皇と「昼食か、夕食」をとることを自ら提案。キッシンジャー補佐官は「日本に対して、とてつもないインパクトになるだろう」と応じた。

こうした本音のやり取りからは、大統領が天皇家に親近感を持っており、敬意を示すために出迎えた形跡は見当たらない。むしろ、“pain in the ass”というかなり下品な言い回しは、皇居を訪問した1953年の思い出があまりよくなかったことを暗示する。大統領は、後日の天皇公式訪米を実現させるより、気軽なアンカレジ会談を選んだ。

ニクソン大統領はまた、「カリフォルニアにいることに対する曖昧な言い訳になる」とも言っている。これは、再選のための大統領選を翌年に控える身としては、なるべく地元カルフォルニア州や周辺州での遊説機会を増やしたかったことを指す。カリフォルニア州サンクレメンテにはニクソン別荘があり、大統領が滞在する際には「西部ホワイトハウス」として機能していた。

ただし、実際の天皇出迎えの際、大統領は西部ホワイトハウスには寄っていない。ワシントンDCを出て、モンタナ州を経て、オレゴン州に1泊。そして、ワシントン州に立ち寄ってからアラスカ入りしている。特にワシントン州は、前回選挙で大統領が敗れた州だ。西部諸州の動向は全体の勝敗のカギになっており、立ち寄った3州は就任後、訪問できていなかった。最終目的地のアラスカ州も、前回選挙で45.3%しか獲得できず、民主党相手候補に2.6%差まで追い詰められた激戦州である。そのため、天皇出迎えを理由に、アラスカに向向

くことは選挙対策の意味があった。ニクソンは内政をにらみながら、アンカレジ行きを決めたのである。

3. 日本の期待

アンカレジ会談については、ニクソン大統領が積極的に提案し、日本政府が受け身の形で応じたというイメージもある。ところが、ニクソン秘密テープを聞くと、大統領がアンカレジ会談を提案するのは日本のサインを受けたものと分かる。この事実はこれまで見過ごされていた。

ニクソン訪中発表後の7月27日、佐藤榮作首相は、米AP通信のミラー会長と会い、「来年以降近い機会に、陛下が訪米されることが望ましい。それをうけてニクソン米大統領の訪日を希望する」²⁴⁾と述べた。発言はすぐに米国をはじめとする世界に向け打電される²⁵⁾。

戦後、米国大統領の訪日は実現していなかった。1960年、第1次安保闘争のあおりで、アイゼンハワー大統領の訪日が中止されており、西側陣営の経済大国として認められるためにも、大統領訪日は日本政府の悲願であったと言える。ところが、ニクソン大統領は、日本より先に中国を訪問することになった。佐藤首相は、たまたま訪問した米通信社の最高幹部に、翌年以降を想定しながら、天皇による米国公式訪問と、答礼としてのニクソン訪日実現が望ましいと述べたのである。首席秘書官の楠田實は「相手がAPの社長だから、うまくタイミングをとらえた感じ」²⁶⁾と日記に記した。

ホワイトハウスで、天皇をどう遇するかが初めて話題に上がるのはその直後のことである。7月28日午前、ニクソン大統領、キッシンジャー補佐官、ハルドマン補佐官の3人がオーバル・オフィスで、次のような会話を交わした。

ハルドマン 報道によれば、彼ら（日本）は、大統領に天皇を招待してほしいようだ。われわれは、これに答える必要がある。答えなければならぬのだ。

キッシンジャー 一度、我々は、欧州旅行の終わりに彼を招待した。欧州旅行の最後にここに来るべきだと言ったのだが、天皇の方で断っている。だから、もう一度招待し直さなければならない。これはよいことだ。

ニクソン そうだ、そうだ、全くだ²⁷⁾。

この時、前財務長官のケネディ特使が来日し、繊維交渉にあたっていた。会話の前段で、キッシンジャー補佐官は、ケネディ特使の強硬な姿勢によって交渉がはかばかしく進展していないことに懸念を示している。訪中発表とあわせ、ホワイトハウスは日米関係が急速に悪化することを恐れた。

テープの中で、キッシンジャー補佐官が、「欧州旅行の終わりに彼を招待した」と言っているが、米政府内部で1971年春、日程の最後に米国を入れる可能性について検討した事実を指している。日本政府は同年2月23日の閣議で天皇訪欧を決定。最初の天皇外遊に米国を含まないことが、対米関係の障害になる可能性を懸念した外務省は決定直前、米政府に通告。「米国抜き」の理由について、日程が長くなり過ぎ天皇夫妻に負担になる、相互訪問が基本なので大統領訪日の見通しの立たない米国を訪問国に入れられなかったと説明した²⁸⁾。

駐日米国大使館のマイヤー大使は、アンカレジ訪問を格上げする非公式な「天皇訪米」を実現しなければ、日米関係に否定的な影響が生じる可能性がある」と指摘。「日本の緊密な同盟国（米国—筆者注）がなぜ天皇を招待しないのだとの報道陣からの問い合わせが殺到するだろう」と本国宛てに懸念の電信を送った²⁹⁾。問題は、本国に持込まれ、訪欧日程を延長できないとしても、アンカレジでの出迎えにアグニュー副大統領を派遣するか、後日の天皇訪米を招請することが検討されていた。エリオット國務長官秘書官が、キッシンジャー補佐官に宛てた書簡には「日本の大衆が、非常に重要だと考えているイベントに対し、不十分な注目しか払わなければ、（日本人の）感情を害してしまう現実の可能性がある」と警告している³⁰⁾。

日本人にとって天皇は特別な存在であり、きちんと対応しないと日米関係に悪影響が及ぶ——。東京の米国大使館や國務省は恐れを抱いていた。だからこそ、天皇に対する厚遇を先回りして用意し、日本の期待にこたえていく。つまり、米国からのイニシアチブと見える行動の背景には、日本の強い期待感が存在し、米国はそう行動するように促される構造があったのである。

4. 中国とのバランス

ニクソン秘密テープからは、さらに、ホワイトハウスは、中国と日本のバランスを考えながら、アンカレジ会談を見ていたことも分かる。日本だけに特別に好意を与えたと受け止められることには警戒感を示していた。日本だけに配慮を見せたという単純な構図だけでは語れないのである。1971年8月9日の『ニューヨーク・タイムズ』紙社説が、ニクソン政権の中国寄りの姿勢を批判³¹⁾したことについて、同日午前のオーバル・オフィスでキッシンジャー補佐官は次のように述べる。

キッシンジャー 今日『ニューヨーク・タイムズ』の社説は、日本について触れている。大統領は、東京に行くべきだ。東京は北京よりずっと重要だと。もし、6カ月前に日本を訪問しようとしていたら、ニューヨーク・タイムズは、(日本の)軍国主義復活に手を貸すのかと述べたであろう。

(略)

キッシンジャー 第一に、大統領はアンカレジで天皇と会う。しかし、中国に対してと比べれば、これは最低限のものだ。

ニクソン 天皇とアンカレジで会うのは、ニューヨークでポンピドゥー(仏大統領)と会うようなものだ。そんなところまで行くなんで。

(略)

キッシンジャー (アンカレジ会談は)日本人(Japs)との関係では役に立つ。一方で、中国に対しては、最低限の動きであると説明することができる。そのように説明するわけではないが、中国はそう読むであろう。これは、日本に行くよりもずっとよい方法だ。訪日は危険(risky)でしょう。

ニクソン いくつかの点を見ても危険だ。貿易や他の分野での日本の政策に対するわが国民の態度を考えてみても危険である。

ハルドマン 日本では、きっと(大統領に対する反対)デモがあるでしょう、閣下。

ニクソン 何てやつらだ(son of bitches)³²⁾。

この時点で、ホワイトハウスにとって大切なことは、翌年の訪中成功であっ

た。日本に好意のポーズを見せる一方で、中国に対しては日本寄りのシグナルとならないように神経を使っていた。中国の毛沢東国家主席と昭和天皇を天秤にかけているのだ。会話は次のように続く。

ニクソン 率直に言って、天皇の米国立ち寄り、は、公式訪問として発表されるべきでない。大統領がアンカレジに行き、天皇と会う。これは単なるジェスチャーである。ジェスチャーとして非常に繊細に扱われる必要がある。天皇は初めて米国の土を踏む、アンカレジに来るが、今回は天皇の日程の都合上、ワシントン DC に来ることができないことをみなが知っている……。

キッシンジャー 実際、われわれは、訪欧後にワシントン DC に来るように要請したのだ。

ニクソン アンカレジでは、演奏隊や赤い絨毯、報道陣や大きな拍手で、天皇は歓迎される。

ハルドマン テレビもよくとりあげるだろう。

キッシンジャー 深夜を越えることになるが……。

ハルドマン 次の日に放映されるだろう。こちら（米東部）は早朝だから、月曜（27日）夜の放送としては完璧だ。（略）一日中だ。

ニクソン 翌日一日中。朝のテレビ・ショーに出て、午後も放送され、夜も、全米中で。

キッシンジャー もちろん、日本でも放送されるだろう³³⁾。

天皇到着は、米東部時間で未明である。ハルドマン補佐官は、一日中このニュースが流されるタイミングであると指摘。天皇を出迎えることによるメリットを説いている。アンカレジへの出迎えは、外交に励んでいることを示すための米国内向けポーズでもあった。広告業界出身のハルドマン補佐官は、PR戦略の専門家である。

以上が、ニクソン秘密テープに見る米側の本音だ。ニクソン政権にとってアンカレジ会談は、戦術的に編み出された政治的な手段であった。

日本の首相官邸は、米国の意図を読んでいただろうか。佐藤首相は8月10日付の日記で「北沢直吉君が米国の状勢の分析。丁度ニクソン大統領から手紙の来たばかりで日米間別に心配する事はないのだが」³⁴⁾と極めて楽観的に書いて

いる。その3日後に、佐藤首相は、大統領に返書を起草した。

閣下がアンカレッジまで出向かれ御会見いただくとの報に接して、私は、閣下に対し衷心より感謝の言葉を申し述べるものであります。(略)閣下の御配慮は、日米友好関係を一層緊密にする大いなるきずなになるものと確信いたします³⁵⁾。

米側の本音と比較するとあまりに無邪気な喜びようだ。首相は、天皇に同行してアンカレッジに行くことまで考えていた³⁶⁾。駐日米国大使館は、大統領の(アラスカへの)「異例の旅」について、「日本を好意的に驚かすことができるし、あまりに良いことすぎて信じられないと響くであろう」「米国が、中国のために日本を見捨てるという懸念に対する予防線にもなる」³⁷⁾と分析しているが、佐藤首相は完全に戦術にはまってしまったように見える。

同じことは、メディアにも言える。報道は、大統領の「配慮」に裏があることをほのめかしているものの、全体のトーンとしては、出迎いを歓迎した。日本の報道機関が米政府の内情を取材する場合、政権中枢部へのアクセスは極めて限られている。すると、取材はどうしても日本側に偏る。日本政府のバイアスがかかった情報しか得られない場合が多い。国外報道の限界である。

5. 天皇の「聖断」

日本側の動きをさらに見てみよう。もともと、アンカレッジ到着は現地時間午後10時40分、出発は午後11時40分で、滞在は1時間だけの予定だった。名目は給油である。日本政府は春先の段階で、「貴地通過は給油のためのみであり、米側による接遇は何等期待しておらず、日曜の夜おそいことでもあり寧ろ辞退したいと考えている」³⁸⁾という立場だった。

「昼食か、夕食を」と考えるニクソン大統領にとって、深夜の到着は不都合だ。そこで、アンカレッジへの午前中到着か、アンカレッジへの1泊を求めたが、日本政府は対応に苦慮する。米国からの働き掛けを受けるのが7月31日。しかし、日程を固める閣議決定は8月3日に迫っていた。大幅な日程変更は極めて難しい。駐米日本大使館のナンバー2、大河原良雄公使は8月3日、ジョンソン国務次官(政治担当)に会い、「もはや天皇の日程を『根本から』変更する

ことは不可能だろう」と伝えた³⁹⁾。

そこで米国は、アンカレジ滞在を2時間に延長する方針に変える。しかし、日本側にとっては、その実現も簡単ではなかった。なぜなら、アンカレジ到着を早めるにも、出発を遅くするにも障害があったからだ。

到着を早めるためには、日本発を前にずらす必要がある。当初予定では皇居発が午前9時10分。天皇と皇后は出発前に朝食をとらなければならないし、宮殿での見送り行事(約15分)もある。午前7時すぎに起床する天皇夫妻にとって、午前9時すぎの皇居出発がギリギリだった。これを変えるのは、高齢の天皇夫妻にとっても、宮内庁にとっても負担になる。一方、アンカレジ出発を遅くすれば、第一の訪問国であるデンマーク到着が遅くなる。当初計画では、首都コペンハーゲン到着は、現地時間午後6時20分。空港には国王フレデリック9世が出迎えることになっており、これ以上遅くなるのは、デンマーク政府との関係から難しい。

結果的には、皇居出発が40分繰り上がる。8月7日、計画を知った入江相政侍従長は、「アラスカヘニクソンがお出迎へにくるといふこと報告。予はお上にとつては大変おとくなことだから是非実現させようといふ。その為御出発が早まつても機中でお食事をすればいゝ」と宇佐美宮内庁長官に述べた⁴⁰⁾。天皇夫妻は実際、朝食を機中でとった。異例なことである。会談実現のために宮内庁は苦肉の策をとらねばならなかったのだ。

交渉の最前線にあった在米日本大使館の牛場信彦大使は、8月5日、「極秘至急(ゆう先処理)」として、次のような悲痛な電報を本国に送っている。

御高承のとおり昨今の日米関係は必ずしも明るうならず、(略)かかる情勢下にあつてニクソン大統領が自らアンカレッジに赴き、両へい下に御あいさつ申し上げるべく申出があつたことは日米友好関係増進のため極めて時ぎに適したものと認められる。(略)アヨカレッジでの両元首の会見が実現すればへい下の御訪米、あるいは米大統領の訪日等への途をも開き、今後の日米関係に極めて良好な影響をもたらすものとする。ついで、ハネダ空港御出発時間のくり上げ、その他これまでの各般準備に各種の不都合ないし困難はありとは存ずるも、上述のとおり事情を御かん案いただき、本件会見がそれにふさわしいかん境の下に実現の運びとなるよう御じん力いただきたく、特にお願ひ申し上げます⁴¹⁾。

牛場大使の電報は、外務大臣宛てではある。しかし、冒頭の「御高承」、文末の「お願い申し上げます」などいたるところに丁寧語や尊敬語がちりばめられており、他の電信とは趣が大きく異なる。事実上、牛場大使から天皇に宛てた直接のお願い文と考えるのが妥当であろう。

さらに、外務省の文書を読んでいくと、アンカレジ会談を行うかどうか、最終的には、天皇自身の「裁可」によって決まっていることも分かる。8月7日、木村俊夫外相臨時代理から牛場大使宛ての電信には次の通りにある。「政府としてはニクソン大統領の配慮を多とし、是非本件実現方陛下にお願いする所存であるが、陛下は目下那須に御所在であるので本件を執奏し、御裁可を得るのは11日（水）となる見込みである」⁴²⁾。天皇夫妻は那須御用邸で静養中であった。帰京は11日正午すぎで、帰京を待つて「執奏」しなければならなかったのだ。

東京からの電信を受けた牛場大使は9日、その内容をジョンソン國務次官に伝え、次官は「日本政府の考えの通り御裁可を得るに至ればこれほどよろこばしいことはなく、ぜひ2時間を確保して日米両国元首にとり相応しい会見を実現したい」⁴³⁾と述べたという。米側に対しても、最終決定には「御裁可」が必要と説明しているのだ。

8月11日、帰京した天皇に対し、外務省が現状を説明する。その日夜に発信された牛場大使宛ての電信は以下の通りである。「米側申出の次第上聞に達したところ、ニクソン大統領が多忙の日程を都合してアンカレッジまで出迎への労を取ることを申出られた厚意を深く多とされ、喜んで同地でお会いになる旨御沙汰があった」⁴⁴⁾

天皇自身の「御沙汰」によって、天皇ニクソン会談の実現が本決まりになる。外務省の一連の文書は、外国元首と会うかどうか、天皇自身の「御沙汰」、いわば「聖断」がなければ動かない実態を示している。

朝食抜きでの出発という、天皇の負担を強いる決定だからという説明もできるだろう。しかし、現実問題として、天皇外遊の決定について天皇自身が関与しているのは明らかだ。事実上の最終決定権を天皇が有しているようにも見える。これは象徴天皇制の実相を考える上で極めて重要だ。天皇は憲法の規定から「国政に関する権能を有しない」はずだからだ。

皇室外交の政策決定の実態については、さらに検討する必要がある。そのた

めには数多くの事例比較が必要であろう。筆者は日米の公文書を使えばある程度可能になると考えるが、さらなる論及は別の機会に譲る。

6. 米国の PR 攻勢

アンカレジの出迎えが日米で発表されるまで交渉は、ワシントン DC で行われた。交渉の中で、ジョンソン国務次官は、発表直後の記者への背景説明（バックグラウンド・ブリーフィング）について、次のように述べた（8月17日）。

例えば米政府として両へい下御訪欧の最初の御立寄り地が米国々土であることをちゆう心御かん迎する旨及びニクソン大統領夫妻は1953年11月副大統領として両へい下より午さんをたまわつた外、両へい下と御一しよにとつた写真がへい下と外国政府要人との初めての御写真として公表された次第があり、ニクソン大統領はこの外今回御出迎を感激しているというようなことをブリーフすることを考えている⁴⁵⁾。

ジョンソン国務次官の前職は、駐日大使である。皇室に対する日本人の気持ちをよく理解した上での説明だと言えよう。ホワイトハウスの背景説明用に作成された文書（プレスガイダンス）では、日本のメディアを意識した注意事項が並んでいる。文書によると、

- ①アンカレジ会談は、天皇に対し尊敬と友情を示すため大統領の希望で行われる
- ②ニクソン訪中発表とは無関係である
- ③他国の元首の接遇としては前例のないものである

——の3点を強調。“Hirohito” “Emperor Hirohito” と裕仁という名前を直接的に呼んだ場合、日本人に礼儀に欠けると受けとめられるので、“His Imperial Majesty”（陛下）または、単に“Emperor”と呼ぶべきだとの注意も付け加えられた⁴⁶⁾。

米国での発表は、日本と同時で西部時間8月20日午後5時、サンクレメンテの西部ホワイトハウスである。『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』『日本経済新聞』は、いずれもワシントン特派員が、米首都から報じており、サンクレメンテの発表を直接取材した形跡はない。会見場には米メディア記者がほとんど

だったと思われるが、米政府は日本のメディアを意識した。

この時期は、米政府、日本側を喜ばせるために、さまざまな政治的配慮を練り出していた。一例は、戦後、皇太子の英語の家庭教師を務めたバイニング夫人をアンカレジ会談に招待することである。実現しなかったものの、米側にとって歓迎の姿勢を示すことが極めて重要だったことを示すエピソードだ。8月25日付で、ウェブスター財務次官補代理（貿易・投資政策担当）が、ヘイグ大統領副補佐官（国家安全保障担当）に書簡を送り、「非常に感動的で心のこもったジェスチャーになる」と説明した⁴⁷⁾。

ちょうど同じ時期、ニューヨーク日米協会のジャパン・ハウス開館式出席のために、常陸宮夫妻が訪米し、9月14日にワシントンDCを訪問する。ニクソン大統領は常陸宮夫妻とも会談の機会を持った。「ここ数カ月、対日関係の否定的側面が喧伝されているが、日本の皇族が来ることは、対日関係の強固さ、米国の日本人に対する友情を示す機会になる」と国務省が強く求めた結果だった⁴⁸⁾。さらに、9月9、10日、福田赳夫外相ら日本の7閣僚がワシントンDCを訪れ、日米貿易経済合同委員会が開かれ、経済摩擦などの懸案が話し合われることになっていた。ホワイトハウスは「この旅行を成功させることに大統領は特に気を使っている」と、閣僚らの航空機手荷物を元首級と同じように扱うよう国防総省に特別に指示を出している⁴⁹⁾。

この時、米国は、国連の中国代表権問題で日本の支持が必要だった。中国と接近する一方で、台湾の代表権を保つため、逆重要事項指定方式、複合二重代表制を提議し、日本に共同提案国になるよう働きかけていた。そのため日本の心証を悪くしたくないという意識が強く、PR戦術につながったと言える⁵⁰⁾。

一方で、日本政府は、アンカレジ会談が政治的に利用される危険性を感じていた。外務省本省は、牛場大使に対し、「出迎えは純粋に儀礼的のものとし、絶対に政治色を帯びさせないこと」と米国に釘を刺すように訓令している⁵¹⁾。

7. 友好の演出と日本の反応

そして、当日である。昭和天皇夫妻は予定通り午後10時、エレメンドルフ空軍基地に降り立つ。基地での歓迎式典で、ニクソン大統領は、「歴史的な会談は、将来にわたって日米の偉大な両国民が太平洋地域および世界の全国民のた

めの平和と繁栄を目ざして友好的に協力し合うという決意を示すものであります」と挨拶した⁵²⁾。草案段階では、「日米両国は、太平洋地域の平和と繁栄に対し、共通の責任を負っている」⁵³⁾という一節があった。これに対し日本政府は、政治色が強すぎると難色を示したため、表現が弱められたのだった。

大統領と天皇はこの後、米軍アラスカ空軍司令官公邸に移動し、それぞれの通訳だけを伴い25分間会談。会談の速記録が入っていると想像される米側の公文書は非公開のままだが、おそらく儀礼的なやり取りに終始したであろう⁵⁴⁾。天皇との会談のために、キッシンジャー補佐官が用意した文書には、当日の会話内容として、6項目を提案している。

- ①両陛下の訪米を歓迎できるめでたい機会に立ち会えることの喜びを強調する。
- ②常陸宮夫妻に会えた喜びに言及する。
- ③二女ジュリー夫妻が、大阪万博のため前年訪日した際の歓迎への謝意を示す。
- ④日本への過去7回の旅行など、個人としての日本とのつながりを話し、両国の緊密な関係がとても重要であり、太平洋において日本を主要なパートナーと考えていることを示す。
- ⑤天皇の海洋生物学への関心に言及し、大統領としても環境分野での国際協力の必要性に興味を持っていることに言及する。
- ⑥正式な招待とまではいかないが、将来の適当な時期に、米国を訪問してほしいという希望を表明する。

同じ文書は、戦後憲法で天皇は法的な権能を持っておらず、天皇は会話を非政治的分野に限定することを望んでいるとの前提を指摘。そのうえで、米国が日本との関係を重要だと考えていること、太平洋地域の平和を維持するための日米の役割への言及は構わないとしている⁵⁵⁾。6番目に挙げた天皇訪米の曖昧な形での招待は実際に言及されたことが別の文書で確認できる⁵⁶⁾。これに対し天皇は、戦後の復興を可能にした米国の支援に対して謝意を示したもようだ。常陸宮夫妻との会談の要旨は公開されているが、大統領の発言は「両国の交流が活発になれば、相互理解も増す」などの一般的な内容である⁵⁷⁾。

しかし、米側にとって天皇と実質的にどんな内容を話したかは重要でない。儀礼的に天皇を厚く遇することを日本側に見せるパフォーマンス、日米友好の

演出がより大切だった。

では、日本側はどう受け止めたのだろうか。9月30日、マイヤー大使に会った佐藤首相は、アンカレジ会談は「日米間の深いきずなを劇的に強調した」と賞賛し、「日本人は、予想外の大勢のアラスカの人々が熱烈に歓迎したことに印象づけられた」と感激ぶりを伝えている⁵⁸⁾。同行した入江侍従長も「大統領は懸命にお上をおいたはりしてゐる」⁵⁹⁾と大統領の心遣いに感銘を受けたようだ。

日本のメディアは会談をどう伝えたのであろう。アンカレジ到着は日本時間の9月27日午後4時。NHK テレビ、TBS テレビ、フジテレビ、NET テレビの4局は、衛星生中継で、到着と基地での式典の様子を伝えた。駐日米国大使館のスナイダー公使は「アンカレジからの衛星放送のコメンテータたちは、天皇夫妻の接待のされ方に満足の意を示し、大統領のあいさつにも好意的なコメントを寄せた」と本国に報告した⁶⁰⁾。

翌28日の新聞朝刊各紙であるが、『朝日新聞』が「微妙な日米間の思惑」⁶¹⁾として、ニクソン大統領が会談を政治的に利用していることを指摘する記事を掲載したほかは、おおむね歓迎ぶりに焦点を合わせた。社会面の見出しは「オーロラの下 堅い握手」⁶²⁾ (朝日新聞)、「北極星が“ようこそ、人間天皇にアンカレジ感動」⁶³⁾ (読売新聞)、「厳寒のアンカレジ 暖かな出迎え」⁶⁴⁾ (日本経済新聞)、『『ようこそ陛下』 堅い握手 アンカレジにオーロラも輝く」⁶⁵⁾ (毎日新聞)と伝えた。否定的な側面を報じない皇室報道の限界を差し引いたとしても、メディア自身がかんがりの感動をしまっている。『毎日新聞』は、アラスカで日本料理店を営む55歳の男性の話として「きょうは日本人としてプライド(誇り)だ。ニクソンさんがわざわざ出迎えられるのは、もちろん“ニクソン・ショック”をやわらげる意味もあるでしょうが、それ以上にわたしはうれしい」⁶⁶⁾との談話を伝えた。

天皇が、太平洋戦争で敵国だった米国の大統領に、「歓迎」される場面。平均的な日本人が親しみの気持ちを抱く昭和天皇が、米大統領に厚く歓待されるということ自体、敗戦による日本人の対米劣等感を癒す効果を持つものだったのではないだろうか。敗戦直後、平服の連合国軍総司令部(GHQ)のマッカーサー司令官が腰に手をあて、正装の昭和天皇と映った写真があった。写真を見たときの悔しい気持ちを晴らしたいという潜在意識が日本人、そして日本のメディアの深層に流れていた。

いずれにしても、日本のメディアは、米国の本音を深く探ることよりも、目の前の歓迎ぶりに焦点を当て、東アジアの国際政治、米国内政治での文脈の中から見た会談の全体像を伝えきれていなかった。翌日の『ニューヨーク・タイムズ』紙が、歓迎一色のエレメンドルフ空軍基地が、太平洋戦争で日本空爆の基地になっていたことを紹介⁶⁷⁾しながら、出迎えた米政府高官の中には「日本の指導者たちの最近の交渉での恩知らずさやぺてんに対し、隠し切れない悪感情が存在する」と分析したのとは大きな違いだった⁶⁸⁾。

8. 最後に

本稿は、日米の公文書を利用して、71年秋の昭和天皇とニクソン大統領のアンカレッジ会談を描く試みであった。皇室に親近感を持っていた大統領という従来のイメージは、ニクソン政権のPR戦略によって作られたものであることをある程度、明らかにできた。それと同時に、1970年代から本格化する皇室外交について、今後の研究課題も見えてきた。

第一に、天皇の外遊の原点となった「ご訪欧」、それに続く「ご訪米」研究の重要性である。天皇外遊へのタブーが取り払われたとされる「ご訪欧」とは何だったのか。「ご訪米」に日本人が期待したものは何だったのか。米国だけでなく、英国、オランダなど関係各国の公文書を利用して実証的に解明する必要がある。

第二に、本文でも触れたが、皇室外交の政策決定過程において天皇自身がどのような役割にあるのかの解明の重要性である。戦後の内閣と天皇の関係は複雑である。内閣の首長である首相と天皇は実態的にどんな関係にあったのかについて本格的な研究はほとんど進んでもおらず、こちらも実証的な研究が必要だ。

いずれにしても、限界が多い新聞資料の分析だけでは実態は見えず、一次資料のさらなる発掘がもっとも重要であろう。

【使用した米国公文書について】

本稿が利用した英文資料とニクソン秘密テープは、すべて米国立公文書館分館（メリーランド州カレッジパーク）に所在する。利用したのは、国務省文書

がおさめられている RG59 という文書群、ニクソン政権下の国家安全保障会議 (NSC) 文書、同じくニクソン政権下の大統領ファイルである。本稿に使用した BOX の分類および内容は以下の通り。注は、BOX 番号までを記した。

RG59 General Records of the Department of State, Subject Numeric Files, Records Relating to Japan, 1970–73

- ・ BOX 2401 From POL 33-4 JAM-US to POL 7 Japan
- ・ BOX 2402 From POL 7 Japan to POL 7 Japan
- ・ BOX 2403 From POL 7 Japan to POL 12 Japan

RG59 General Records of the Department of State, Subject Numeric Files, Executive Secretariat

- ・ BOX 222 Briefing Books (1958–1976)

Nixon Presidential Materials Project, National Security Council Files

- ・ BOX 342 Subject Files, HAK(Henry A. Kissinger)'s Evening Notes
- ・ BOX 925 VIP Visits
- ・ BOX 984–987 Alexander M. Haig Chronological Files
- ・ BOX 757 Presidential Correspondence 1969–1974
- ・ BOX 1025 Presidential/HAK MemCons

Nixon Presidential Materials Project, President's Office Files

- ・ BOX 86 President's Meetings File, 1969–74

注

- 1) 波多野勝『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』草思社、1998年。同書は1921年の裕仁皇太子の訪欧を扱った研究だが、最終章で、1975年の天皇訪米までの戦後皇室外交を概観している。
- 2) 佐道明広『『皇室外交』に見る皇室と政治—日本外交における『象徴』の意味—』『年報・近代日本研究』20 宮中・皇室と政治』山川出版社、1998年、206–231頁。
- 3) 河西秀哉『『新生日本』の出版と皇太子外遊』『象徴天皇制と現代史 年報・日本』

現代史第9号2004』現代史料出版、2004年、109-143頁。

- 4) 波多野前掲書、243頁。
- 5) 佐道前掲書、221頁。
- 6) 藤山樞一「日米関係の新時代ひらく一天皇、皇后両陛下ご訪米に随行して」『月刊自由民主』238号、1975年、23-30頁。当時の安川社駐米大使も同じようなことを述べている。安川社『忘れ得ぬ思い出とこれからの日米外交—パールハーバーから半世紀—』世界の動き社、1991年、237-238頁。
- 7) 『朝日新聞』1975年10月3日夕刊、11頁。
- 8) Subject: Visit of the Emperor of Japan; in the folder of State Visit of Emperor Hirohito of Japan, 2-3 Oct., 1975; BOX 222.
- 9) 島山和久「アメリカ国民に新たな天皇像を」『天皇皇后ご訪米記念写真集』毎日新聞社、1975年、138-141頁。
- 10) 佐藤榮作『佐藤榮作日記』第1-6巻、朝日新聞社、1997-1999年。
- 11) 入江相政『入江相政日記』第1-6巻、朝日新聞社、1990-1991年。
- 12) 例えば、我部政明『沖縄返還とは何だったのか—日米戦後交渉史の中で』日本放送出版協会、2000年。
- 13) 週刊新潮(2005年10月20日号)は、フォード大統領図書館に、天皇訪米の前、マッカーサー夫人が、天皇による亡き夫の墓参りを望んだ手紙が所在すると報じた。「昭和天皇『訪米30周年』秘話」『週刊新潮』第50巻第40号、2005年、55-58頁。
- 14) ニクソン・テープについては、米国立公文書館のホームページ(<http://nixon.archives.gov/find/tapes/index.html>)が詳しい。現在のところ1971年2月から1973年7月までの2019時間分が一般公開されている。NHKは2005年5月28日、秘密テープを題材に「BSドキュメンタリー外交の瞬間 71年ニクソン秘密テープが語る米中接近」を放映した。
- 15) 皇室用語では、天皇、皇后が、外国元首や王族と会うことを「ご会見」と呼ぶ。当時の新聞も、天皇とニクソンが会ったことを「会見」と表記しているが、一般的な用語でないので、本稿では「会談」に統一する。
- 16) 欧州での訪問国は、デンマーク、ベルギー、フランス、イギリス、オランダ、スイス、西ドイツの7カ国。当時の欧州行きは給油が必要で、北周りの場合、アンカレジで給油をした。天皇は、往路の9月26日と、復路の10月13日、アンカレジに寄った。
- 17) 日本での発表は8月21日午前9時、米国での発表は8月20日午後5時(米西部時間)。日米同時であった。
- 18) 『朝日新聞』1971年8月21日夕刊、1頁。

- 19) 『読売新聞』1971年8月21日夕刊、1頁。
- 20) 『毎日新聞』1971年8月21日夕刊、1頁。
- 21) 波多野前掲書、222頁。
- 22) 国会会議録検索システム。
- 23) Conversation No. 552-3; 10:23 am–12:30 pm, July 30, 1971; Oval Office; Nixon Whitehouse Tapes.
- 24) 楠田實『楠田實日記—佐藤栄作総理首席秘書官の二〇〇〇日』中央公論新社、2001年、621頁。
- 25) 会見に同席したAP通信の東京支局長が、マイヤー駐日米大使に話したところでは、佐藤首相は自分のイニチアチブで2度、天皇訪米に言及した。Tokyo 07326, Subject: AP Interview with PRIMIN Sato (July 28, 1971); in the folder of POL 7 Japan (6/1/71); BOX 2402. 同じ文書によると、外務省はAP通信に対し記事を流さないよう要請したが、すでに配信後だったという。
- 26) 楠田前掲書、621頁。楠田は「社長」と書くが、英語の肩書きは、“President and Chairman”である。
- 27) Conversation No. 549-7; 10:20 am–11:16 am, July 28, 1971; Oval Office; Nixon Whitehouse Tapes.
- 28) 森治樹外務事務次官からマイヤー大使への説明。Tokyo 01573, Subject: Emperor's Visit to Europe in Autumn (February 23, 1971); in the folder of POL 7 Japan (1/1/71); BOX 2401.
- 29) Tokyo 01608, Subject: Emperor's Trip (February 23, 1971); in the folder of POL 7 Japan (1/1/71); BOX 2401.
- 30) Subject: The Emperor of Japan's Arrival at Anchorage—Official Representation (May 13, 1971); in the folder of POL 7 Japan (1/1/71); BOX 2401.
- 31) Tokyo before Peking, *New York Times*, August 9, 1971, p. 28.
- 32) Conversation No. 557-1; 8:52 am–11:47 am, August 9, 1971; Oval Office; Nixon Whitehouse Tapes. 「ニューヨークでボンピドゥーと会う」の意味は不明。
- 33) 同上。
- 34) 佐藤前掲書、395頁。「北沢直吉君」は、自民党衆議院議員。
- 35) 佐藤総理発ニクソン大統領宛て返書(案)。楠田前掲書、804頁。米側に保存されている英訳文書によれば、日付は8月14日になっている。Subject: Letter from Prime Minister Sato to the President (August 14, 1971); in the folder of Japan (Sato Corr) 1969–8 Jul. 1972; BOX 757.
- 36) 楠田前掲書、631頁。

- 37) Subject: Evening Notes (August 9, 1971); in the folder of June 1971–November 30, 1971 [1 of 1]; BOX 342.
- 38) 在米牛場大使在アンカレジ吉田総領事宛て愛知外相発外務省電信第 2596 号 (1971 年 5 月 12 日発)。
- 39) Subject: Miscellaneous Items (August 3, 1971); in the folder of Haig Chron (Aug. 1–6, 1971 [2 of 2]); BOX 984.
- 40) 入江前掲書、第 4 巻、299 頁。
- 41) 外務大臣殿牛場大使発電信第 2236 号 (1971 年 8 月 5 日発)。
- 42) 在米牛場大使宛て木村外相臨時代理発外務省電信 1664 号 (1971 年 8 月 7 日発)。
- 43) 外務大臣殿牛場大使発電信第 2276 号 (1971 年 8 月 9 日発)。
- 44) 在米牛場大使宛て外相発外務省電信 1691 号 (1971 年 8 月 11 日発)。
- 45) 外務大臣殿牛場大使発電信第 2399 号 (1971 年 8 月 17 日発)。
- 46) Subject: Press Guidance for President Nixon's Trip to Anchorage to Meet the Emperor of Japan September 26, 1971; in the folder of Haig Chron (Aug. 19–Sept. 2, 1971 San Clemente [2 of 2]; BOX 985.
- 47) Subject: To General Haig from Donald A. Webster (August 25, 1971); in the folder of Haig Chron (Sept. 3–13, 1971 [1 of 2]); BOX 986.
- 48) Subject: Appointment with President for Prince and Princess Hitachi (July 10, 1971); in the folder of POL 7 Japan (6/1/71); BOX 2402.
- 49) Subject: Administrative Support for Trip by Japanese Cabinet Officers (September 3, 1971); in the folder of Haig Chron (Sept. 3–13, 1971 [2 of 2]); BOX 986.
- 50) 佐藤首相はアンカレジ会談の 4 日前の 9 月 22 日、自民党内の反対が強かったなか、逆重要事項指定方式と複合二重代表制の共同提案国になることを決めた。
- 51) 在米牛場大使宛て木村外相臨時代理発外務省電信第 1747 号 (1971 年 8 月 17 日発)。
- 52) 『日本経済新聞』1971 年 9 月 28 日朝刊、1 頁。
- 53) Subject: Suggested Text—Welcome for Emperor Hirohito (September 20, 1971), in the folder of Haig Chron–Sept. 21–25, 1971 (Done By Col. Kennedy); BOX 987.
- 54) 以下のファイルに会話内容が含まれる可能性がある。MemCon-The President and Emperor Hirohito Sept. 26, 1971; BOX 1025.
- 55) Subject: Your Discussion with Emperor of Japan at Anchorage September 26 (September 23, 1971); in the folder of Emperor Hirohita [sic] of Japan (Anchorage, Alaska) Sept. 1971; BOX 925.

- 56) サンクレメンテで1972年1月6日に行われた日米首脳会談で、佐藤首相は「陛下は、訪米の可能性について大統領と話し合えて特に喜んでいる」と述べた。Subject: Meeting with Eisaku Sato, Japanese Prime Minister, on Thursday, January 6, 1972 at 1:30 p.m. at San Clemente (January 6, 1972); in the folder of Japan JAN 72 SATO (San Clemente) [2 of 3]; BOX 925.
- 57) Subject: Meeting of the President with Prince and Princess Hitachi 3:03 PM-3:30 PM, Sept. 14 (September 14, 1971); in the folder of Beginning September 12, 1971; BOX 86.
- 58) Tokyo 09686, Subject: Sato's Appreciation for Anchorage Meeting (September 30, 1971); in the folder of POL 12 Japan (1/1/70); BOX 2403.
- 59) 入江前掲書、第4巻、306頁。
- 60) Tokyo 09480, Subject: Media Hail Emperor's Departure (With Exception Communist Party Organ) (September 27, 1971); in the folder of POL 12 Japan (1/1/70); BOX 2403.
- 61) 『朝日新聞』1971年9月28日朝刊、2頁。
- 62) 同3頁。
- 63) 『読売新聞』1971年9月28日朝刊、15頁。
- 64) 『日本経済新聞』1971年9月28日朝刊、23頁。
- 65) 『毎日新聞』1971年9月28日朝刊、23頁。
- 66) 同上。
- 67) Nixon and Hirohito Pledge Amity in Anchorage Talks, *New York Times*, September 28, 1971, p. 1.
- 68) At Anchorage: Symbolism but Not a Thaw, *New York Times*, September 28, 1971, p. 3.